

国立市がごみ減量で がんばっていることや課題

国立市生活環境部長 山田 英夫

国立市は東京都のほぼ真ん中に位置し、人口 75,000 人弱の、大学と住宅地、農地を中心とした落ち着いたたたずまいの市です。国立市がごみ減量施策でがんばっているふたつのことを、紙面を借りてみなさまにお伝えしたいと思います。



国立市はEPRを柱とした循環型社会を目指す

国立市のごみ減量施策でがんばっていることの一つは、実際に実施していることとして、可燃ごみ(燃やさざるを得ないごみ)以外はすべて再資源化して埋め立てをなくしたことです。先日数えましたら、収集後に国立市環境センターで再分別することで、40種類以上に分別していました。環境センターでの再分別は、他の追随を許さないシステムであろうと自負しています。

さてもう一つは、廃棄物行政の方向性について「EPR(拡大生産者責任)を柱とした循環型社会を目指す」という少し先駆的な考え方を持っていることです。可燃ごみ以外すべて再資源化しているにもかかわらず、資源化率は多摩地域では下から何番目といった状況ですが、この目標があるためさほど気にはしていません。

多摩地域の廃棄物行政は、昭和 29 年の清掃法施行によりいっせいにスタートを切り、昭和 50 年代に焼却・埋め立て行政に行き詰まり、平成に入ってリサイクル施策優先の方向付けがなされ、平成 10 年ごろから家庭ごみの有料化が行政目的になってきたといった感があります。

有料化を実施したほとんどの市は、有料化によるごみの減量と経済的誘導による分別の促進を廃棄物行政の目的とし、リサイクル率の向上に専念しています。有料化未実施の市は有料化実施が大きな行政目的になってしまっています。

しかし、有料化未実施の国立市がいうのも僭越ですが、有料化による減量率は、おおむね 10%程度で、さらに減らしたければ料金を吊り上げていくしかありません。

また、リサイクル率が向上すれば、地球に与える環境負荷は減るものの「可燃及び埋め立てごみ」が減り「資源ごみ」が増えるだけで、一般廃棄物の総量は変わらないと思います。

では、どうしたら実質的にごみが減りゼロ・エミッションに近づくのだろうと考えて、行き着いたのが「EPRを柱とした循環型社会」の構築という考え方でした。

次ページの図 1 と図 2 をご覧ください。図 1 が現在の一般廃棄物の流れです。図 2 が国立市が目指す循環型社会での一般廃棄物の流れです。図 2 の流れに近づくほど行政のリサイクル率はゼロに近づいていくことになります。

図1 これまでの廃棄物の資源循環のイメージ図

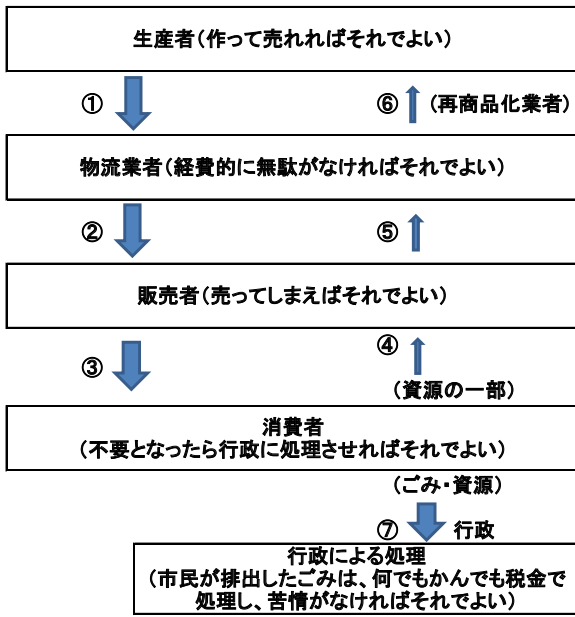
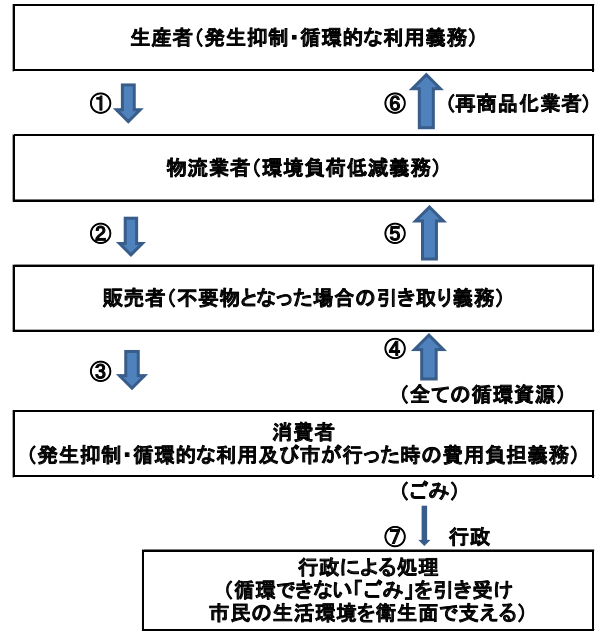


図2 目指す循環型社会の廃棄物と資源循環のイメージ図



国立市の5Rは3Rにリペアとリターンをプラス

方向性は以上のように定まりましたが、どうしたら図2のように廃棄物の流れを変えていけるのが平成20年ごろからの国立市の課題でした。お気づきでしょうか、廃棄物の流れを変える作業は基礎自治体レベルの取り組み枠を大きく超えています。そこで、そのことに気付いている一部の民間団体や基礎自治体が国に対して「EPR」法案の成立に向けて要請を行っています。国立市も市長会などを通して要請を行っています。

それはそれとして、廃棄物の流れを循環型に変えていくための国立市の取り組みをご紹介します。まず初めに行ったのが、平成21年度に日野市が始めた「容器包装お返し大作戦」に賛同し国立市も市報に「くにたちECOプロジェクト」と銘打って、広報等で5Rの普及を始めました。3Rにリペア(直す)とリターン(戻す)のふたつを加え5Rとしたのです。

図2の循環型社会に向かうために基礎自治体と消費者にできることは、図2の④の流れを作ることしかできないのです。その先は、事業者が責任を持っていただきます。これがリターンの目的です。

消費者は、買い物のとき不要な容器包装を剥がして販売店のごみ箱においてくる。不要となったペットボトルやビン・カンはその次の買い物の時に販売店に返す。引き取らない販売店からは買わない。⑤から先は、製造・物流・販売事業者の責任です。彼らは困るかもしれませんが我々消費者は知ったことではありません。困って工夫してもらうのが目的ですから。エコロジストを自負しゼロ・エミッションを目指す消費者には強い気持ちが必要です。

実際「レンズ付きフィルムのカメラ部分をリユース(部品によってはリサイクル)する」「ペットボトル容器の材質を薄くする」「シャンプーや化粧水などの詰め替え製品の開発」などの実質的にごみを減量する工夫は、基礎自治体や消費者の努力ではできないことで、発生源に「今後もさらなる工夫をしてくれるよう」お願いするしかありません。



生ごみと古紙ついて

次に生ごみの取り組みですが、生ごみ対策すなわち堆肥化と思いついでいる方が多いかと思いますが、食べ物の6割を輸入し3割を食べ残すなどといわれている日本国民がまずやらなければいけないことがあります。食べ物を粗末にしないということです。先日、ごみ・環境ビジョン21主催のごみ大学セミナーで「フードバンクの取り組み」を聞きましたが、これには頭が下がります。市ができることとして「買すぎない・作り過ぎない・食べ残さない」の「食育3ない運動」を推進しています。まずは発生抑制、それでも出る生ごみはたい肥化するといった優先順位をしっかり守りたいと思います。

実現は難しいのですが、最後に古新聞に対する考え方を披露させてください。行政回収では、有価物を決まった日に電柱のわきに出してもらい所有権もはっきりしない状態にさせて収集しています。持ち去る人が出ても不思議はない。むしろ、EPRの流れに最も乗せやすい古新聞を多大な税金を使って収集し、リサイクル率を競いあっている行政にもいくぶん問題があるとは思いませんか。従って、新聞については、行政回収をやめて全ての新聞を販売店回収と集団回収により図2の流れで循環させたいと考えています。

最後に、誤解のないよう有料化についての考えを述べさせていただきます。国立市が将来目標として掲げている「EPRを柱とした循環型社会」の構築、一般廃棄物の図2の流れを作り上げていくための施策すべてにおいて有効に作用する施策であると考えています。

国立市にとって家庭ごみの有料化は、そう遠くない将来実現できるかもしれませんが、その先にある廃棄物施策における「EPRを柱とした循環型社会」の構築は、かなり遠い道のりだと思っています。実現のための近道は、国立市だけでなく多くの方々と考え方を共有することです。みなさまも、ご賛同いただけましたらどうかお近くの方から「EPRを柱とした循環型社会」について広めていただきたいと思います。

祝

イタリアの古都ボローニャで毎年開催される「ボローニャ国際絵本原画展」。世界各国から子どもの本のために制作された作品が集まり、さまざまな国籍の審査員による審査が行われ、世界的なイラストレーターの登竜門となっています。

今年は3190人の応募があり、入選はたった75人ですが、その中になんと…ごみっとの表紙の版画家・猫野べすかさんの名前が!!!

べすかさんの版画が初めてごみっとの表紙を飾ったのは8年前。版画家として活躍し始めて間がない頃でした。今では絵本の仕事は引きも切らず…人気の版画家さんですが、ボランティアでごみっとの表紙イラストを提供してくださっています。今年は原画展が日本でも巡回します! ごみっとでお伝えしきれない原画の美しさを、どうか足を運んでご覧になってみてください。

猫野べすかさん

ボローニャ国際原画展に入選!!



出品された作品のひとつ「大亀モウラ」

* 板橋区立美術館 7月5日～8月17日 * (兵庫県) 西宮市大谷記念美術館 8月23日～9月28日

* (石川県) 七尾美術館 11月7日～12月14日 * (鹿児島市) 長島美術館 12月20日～2015年1月25日